

公開講演会

第82回公開講演会—平城宮朱雀門復原—

1998年4月25日

◆渡辺晃宏：平城宮の宮城門

平城宮の南面中門である朱雀門は、唯一8世紀に遡る中国風かつ氏族名に由来しない特殊な門号である。しかし、中国において、皇城南門を朱雀門と称したのは隋唐長安城が最初である。平城宮の南面正門には氏族名に由来する大伴門の名称も9世紀まで併せて用いられたが、平城宮で初めて南面中央の門の規模が他の門に抜きん出たものになったことを重視すれば、朱雀門の名称は、平城遷都時に唐長安城に倣って付けられたのであろう。

平城宮には朱雀門を含めて他の宮城と同様計12の宮城門があったと考えられ、このうち8つが発掘調査により確認ないし推定されている。しかし、平城宮には東張り出し部があるため、東面門の配置が不規則で、門号推定の上で大きな障害となってきた。今回平城宮の宮城門の史料を整理し、史料上確認される4つの東面門号のうち、県犬養門を東張り出し部中央の門、建部門を東院南面中央の門、小子門をその西の東一坊大路に南面して開く門、的門を小子門を宝亀年間に改称した門号に同定した。

◆村田健一：朱雀門復原研究の舞台裏

通常、復原の資料は極めて限られており、例えば朱雀門においても平面規模、屋根に瓦が葺かれていたことしかわからない。したがって、史跡における復原とは、当時の建築に対する考え方、構造、意匠、建築技術等を理解した上で、当時の人ならどのような建物を建築したのかを考えながら設計することである、と持論を述べた。したがって復原研究とは復原対象の研究と言うより当時の建築を理解するための研究が主であると説明した。

後半は、「古代建築において入手可能な木材の最大長は10m余りで、これが建物の規模・構造を規定する。朱雀門の柱間が5mであるのもそのため」、「古代には外見は同じようにみえても2種類の建築構造システムがある」、「古代の天井は軒の深い本格的な建築に用いられるもので、水平方向のねじれを防ぐ構造材である。朱雀門も天井をはっている。」など、近年の復原研究の成果を発表した。

第83回公開講演会—海外文化財事情 調査と保存—

1998年10月17日

◆臼杵 勲：ロシア極東の考古学調査

ロシア極東は日本列島の隣接地域のひとつで、列島の原始・古代文化について考察する上でも重要な比較地域であるが、中国・朝鮮半島にくらべその内容がよく知られていない。そこで、ロシア極東の自然・歴史、ロシア側の研究の歩みと現状を紹介し、続いて旧石器時代以来日本列島との間に、どのような共通性・関係があったかを述べた。さらに、現在さかんに行われている日ロ共同調査のいくつかについて、それぞれの目的・内容・課題を紹介した。最後に、現在ロシアが直面している経済問題から、ロシア極東でも、調査研究・博物館活動・遺跡の保護と活用を支障が現れていることを紹介し、日本の協力の必要性を述べた。

◆杉山 洋：アンコール遺跡群の調査と保存

現在アンコール遺跡群では各国の調査・修復チームが活動を行っている。日本からも上智大学のアンコール遺跡国際調査団と日本国政府アンコール遺跡救済チームが活動しており、文化庁と奈良国立文化財研究所も1993年度から「アンコール文化遺産保護共同研究」事業を開始した。外国チームでは、フランスの他、アメリカ・インドネシア・中国・ドイツが活動している。

今回の講演会ではこうしたアンコール遺跡群における調査・修復の現状を日本の活動を中心に紹介した。併せて国際文化交流の視点からこれらの活動をとらえるとともに、国際文化交流の持つ問題点にも言及した。

◆沢田正昭：唐代古墳壁画の保存

中国陝西省に所在する唐代の古墳壁画、永泰公主墓や懿德太子墓などの壁画は、およそ70年前から、特殊な接着剤で布に移してはぎ取り、博物館に保存されている。これらの壁画は、吸放湿性のある土が壁画のバックにあるために壁画自体は安全に保存されてきた。しかし、すではぎ取られた壁画資料には土が削り取られて残っていない状態にある。土の物性に見合う新しい保存材料を開発して、壁体を支えるような強化修理が必要になる。さらには、壁画顔料の分析をもとにして、顔料の劣化や汚染、あるいは変質による変色の実態を究明し、今後の保存対策を講じた。内容の一部は、科研費（国際学術研究／代表・田中琢）の研究成果によるものである。